

## ヘデラの増殖技術改善による

## 短期育苗と被覆肥料

東京都農業試験場園芸部

研究員 佐藤澄仁

## はじめに

グランドカバープランツは東京を中心に生産が始められた。当初（昭和51年）規格統一された時は70種程度だったが現在では150種と多くの種類が生産されている。最近の緑化植物の供給可能量は全国で16,000万本となっている。その中でコンテナ緑化植物が全体の約35%を占めているが、特にグランドカバープランツはコンテナ品の70%を占め、5,000万ポット毎年供給されている。

最近の生産上位種類をみると、コグマザサに代表されるササ類が最も多く、次いでつる性植物のヘデラ・ヘリックスの順である。草本類では季節感の強い花着きもののシバザクラ、また、個人庭

図1 グランド・カバープランツ生産量の推移\*1 (千万ポット)

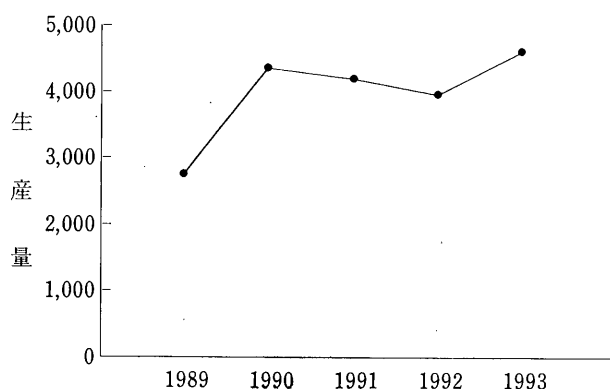


表1 種類別生産量上位の推移\*1 (千ポット)

種 類	1991	1992	1993
コグマザサ	5,403	5,515	5,070
ヘデラ・ヘリックス	5,102	3,116	3,085
タマリユウ	3,111	2,750	2,641
シバザクラ	2,734	2,405	2,100
ヘデラ・カナリエンシス	1,885	2,268	2,462

注) \*1: 日本植木協会資料より

園等で古くから利用されているタマリユウの需要が根強いといえよう。

これら緑化植物の繁殖の多くは実生および挿し木により行われ、一般には挿し木箱か圃場のベツトに挿し木を行うか、または播種して育苗したものを鉢に上げ、出荷規格まで栽培管理する。

そこで、グランドカバープランツで周年需要のあるヘデラ・ヘリックスの繁殖を直接ポリポットに挿し木を行い、従来挿し木床は清潔な無病の用土に無肥料であったが、肥料混入による短期育苗について検討したので、その概要を紹介したい。

## 試験方法

ヘデラ・ヘリックスを供試し、1990年11月27日、1991年1月23日、1992年4月8日、1992年7月27日にポリポット径10.5cmに3節2葉残して、3本直接挿し木をおこなった。用土は赤土を用い、被覆複合肥料（くみあい被覆磷硝安加里13-3-11）ロング100、ロング180、ロング360とマグアンプ肥料を表のとおり混入した。挿し木後はマットの上に置き、密閉挿しとし底面から灌水した。

## 結果の概要

1. 11月挿し木の活着は、各区とも高く生育は5・6カ月で出荷サイズに達した。11月の挿し木ではマグアンプ10g/l、マグアンプ5g/l、ロング100-2.5g/lの順で生育がよかった。1月挿し木の活着は、各区とも高く施肥した区では無施肥に比べ5・6カ月出荷サイズに達した。施肥することにより生育を早めることができ、施肥することによる肥焼けはみられなかった。マグアンプ-5g/l、ロング100-2.5g/l、マグアンプ10g/lの順で生育が特によかった。1月、11月挿し木ともロング360で後半生育が増す傾向を示した。また、1月、11月挿し木では挿し木時期

図-2 草丈の推移 (11月挿し木)

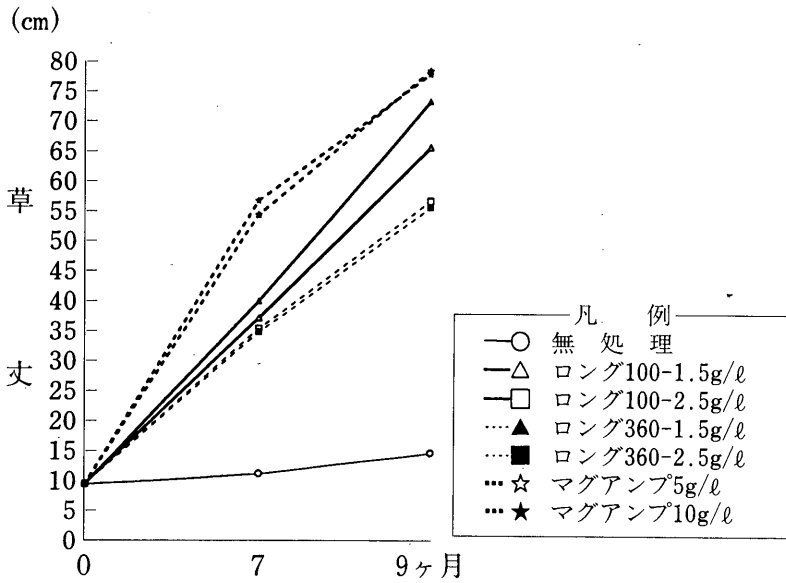


図-3 草丈の推移 (1月挿し木)

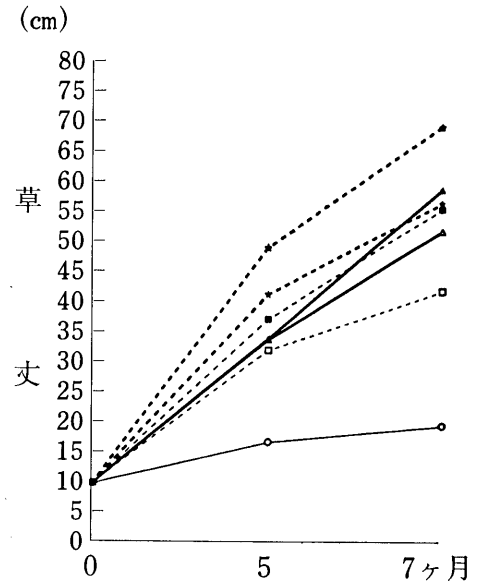


図-4 草丈の推移 (4月挿し木)

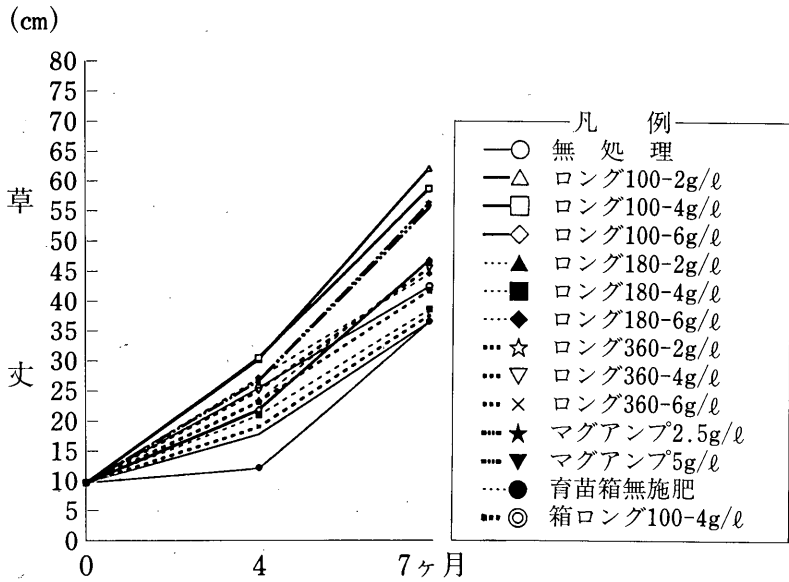
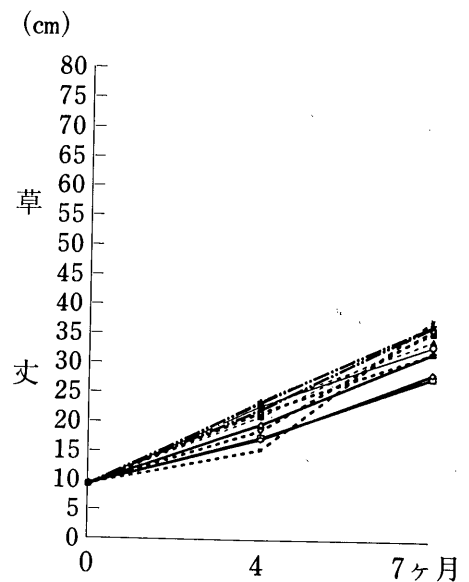


図-5 草丈の推移 (7月挿し木)



による生育の差は認められなかったが、早挿しで伸長量がやや大きかった。4月挿し木の活着は、ロング100-6g/lでやや低く、他の区では差は認められず高かった。ロング100-2g/l、ロング100-4g/lで4カ月で出荷サイズに達した。また、各肥料とも施肥量が多くなるにしたがい生育が遅い傾向を示した。従来の挿し木箱に比較してポットに直接挿し木することは生育が早く、挿し木箱に施肥することにより効果的であった。7月挿し木の活着は、夏期の活着しづらい時期であり比較的低い傾向でロング100-6g/l、ロング

100-4g/l、ロング180-6g/lで特に低い傾向であった。生育はロング180、ロング360、マグアンプの各肥料で無処理と同等の生育を示し、各肥料とも施肥量が多くなるほど生育が悪くなった。また、肥料別に生育をみるとマグアンプ、ロング360、ロング180、ロング100の順で生育はよかった。

2. 以上のことから、マグアンプ肥料は各時期とも肥焼け等施肥することによる障害は認められず、肥効も高く生育を早めることができたが、年間10~30万ポットを生産する現場では高価格によ

表-2 ヘデラ・ヘリックスの挿し木月別活着率 (%)

処 理 区	11月挿し木区	1月挿し木区	4月挿し木区	7月挿し木区
無 処 理	100	100	100	90
ロング100-1.5g/l	100	100	—	—
ロング100-2g/l	—	—	90	90
ロング100-2.5g/l	100	100	—	—
ロング100-4g/l	—	—	90	80
ロング100-6g/l	—	—	80	60
ロング180-2g/l	—	—	100	90
ロング180-4g/l	—	—	90	100
ロング180-6g/l	—	—	100	80
ロング360-1.5g/l	100	90	—	—
ロング360-2g/l	—	—	100	100
ロング360-2.5g/l	100	95	—	—
ロング360-4g/l	—	—	100	100
ロング360-6g/l	—	—	100	100
マグアンプ <sup>2</sup> 2.5g/l	—	—	100	90
マグアンプ5g/l	100	95	90	90
マグアンプ10g/l	100	100	—	—
育苗箱無施肥	—	—	90	—
箱ロング100-4g/l	—	—	90	—

図-6 草丈の推移 (7月挿し木)

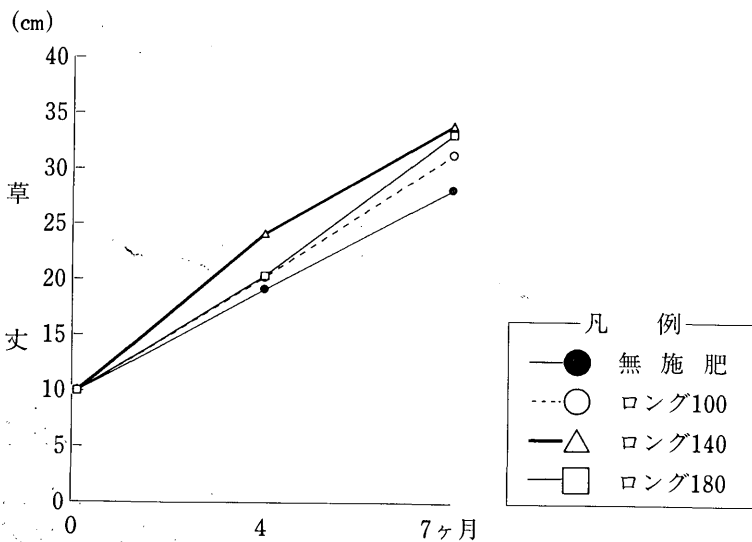


表-3 発根率

無 施 肥	90
ロング 100	80
ロング 140	90
ロング 180	90

\*<sup>3</sup>1993.7.23挿し木

る経済的な問題が残される。被覆複合肥料ロングは11月, 1月, 4月ではロング100-2 g/lで生育が早いことから効果的であると推察された。夏

期7月挿し木ではロング100では養分の溶出が著しいため肥焼け等障害を起し, 逆にロング360では生育期間中に十分な養分が溶けださないため効果が期待できないものと推察される。夏期のポット直接挿し木での施肥は高温期の溶出がすくない肥料の検討が必要である。

3. そこで, 1993年7月23日に前年同様挿し木を行い, 初期の溶出の少ないロング140を加え調査を行った。結果は前回同様にロング100は活着率は低く, 草丈の伸びもよくなかったが, ロング140は活着率は高

く, 生育も良好であった。

まとめ

従来, 11月から2月に挿し木繁殖を行い翌年2月から5月に出荷最盛期を迎えるヘデラ栽培は, ポット直挿し木繁殖を行うことにより鉢上げ等の労力の軽減が図れる。併せて被覆複合肥料ロング100を元肥施用することにより育苗期間の短縮ができ, また, 挿し木繁殖時期を先に延ばすことができ, 労力の分散にも役立つといえる。